



小説 屋形宗慶

挿絵 篠塚醸二

立ち読み版

第一章	春のうららの拉致事件。
第二章	無理矢理誘われ校内で。
第三章	逃げ込む電車に痴女の罨。
第四章	鬼の居ぬ間に独り占め。
第五章	初夏の陽気と痴情の樂園。

登場人物紹介

Characters



とうどう ゆら
藤堂 由良

巫山学園の三年生。同好会『H研』の会長を名乗る。健康的に引き締まった肢体の持ち主。

いちじょうれん
一条 蓮

『H研』の副会長。常に白衣を纏う、銀縁眼鏡と黒髪が印象的な少女。

にのみやきさら
二ノ宮 貴沙良

ツインテールの小柄な二年生。『H研』の会員の一人。高飛車な性格。

さおとめ かずみ
早乙女 一海

巫山学園に入学したばかりの、一年生の少年。

「うああ……！ そんなに弄らないでくださつ、うかうッ！」

三つの手にそれぞれ違ったタッチで巨木を愛撫され、一海はその確かな快感に腰をビクビクと震わせる。彼女たち——先輩という名の痴女達が我がもののように弄り回すそれは、コンプレックスの権化とも言えるものだったのだ。故に自分の手ですらほとんど触ることのない部分だった。

（手が、手がッ、ボクの、触ってるッ！ 女の人の手に触られるって、こんなに……ッ）
自分の手では絶対に感じることはないだろう甘美で鮮烈な官能。一瞬、逆レイプされて、いるという身分も忘れ、たまらず身震いして快感に顎を反らせる。

思春期の始めの頃には、人並みの性欲に駆られて手淫で慰めたこともあった。だがこのサイズだ。オナニー一つにも人並み以上の苦労がある。さらには、事後の処理も人の数倍余計にティッシュを消費する。気持ちよさ以上の苦労が付きまとう彼に、「ヌク」という行為は非日常的なことだ。それ故、一海の肉柱はその雄壮な姿とは裏腹に、あまりにも刺激に慣れない童貞以上に初なペニスだった。

——ニチャニチャニチャニチャニチャニチャニチャニチャ……。

「おーっ？ 第一チンポ汁出てきたな。気持ちよくなってきたか一海い？」

由良の柔らかい手のひらの中で揉みしだかれる亀頭のワレメから、ぬるりとした体液が滲み出し始めていた。それが鈴口から湧き出せば湧き出すほど、短い髪も快活そうな美痴女の手の動きは滑らかなになり、加速度的に亀頭愛撫は加熱していく。

「んあああああッ！ あ、あああ、ああんんんーッ!!」

四肢が突つ張り、紅潮を見せ始めた全身がしつとりと汗ばみ始めていた。純潔の性器から有無を言わず入力され、脳の中枢を直接責めてくる激甚な快感。少女と見紛うような美少年は、その拷問にも似た快感責めに苦悶の表情を浮かべて身を振り、仰け反る。

「男のくせに女の子みたいな声で悦がっちゃって。まさかもうイキそうだなって言わないわよねえ？ 早漏にしたって早すぎるわよ？」

ペニスヘッドへの未知の強烈な刺激に悶える一海を目で楽しみつつ、貴沙良の手は彼のペニスがビクビクと切羽詰まったようにしゃくり上げていることを感じ取っていた。

「こないいいチンポもってんのに早漏じゃ勿体ないぜ、一海い」

手のひらに包み込んだ亀頭が漏らす男汁ローションは、すでに由良の肘まで垂れ落ちるほどになっている。手の中でヌチャヌチャと音を立てながら弄ばれる雁頭は、今にもはち切れそうなほどに膨張し、臨界点が近いことを如実に表していた。

「ソウくうううんッ！ はあッ！ はあッ！ そ、ソウロウ……？」

「早漏知らねえ？ ソーローってのはな、チンポ弄られるとすぐチンポ汁射精しちゃうヤツのことだよ。早漏でも根性のあるタフなチンポならオッケーだけどな、アタシはさ」

（そ、早漏、なのかな……。でも、こんなことされたら、誰でもすぐううッ……。!!）
充血しきって、硬いスポンジのような感触になっているペニスヘッド。それを短髪の美痴女は、たっぷりのカウパーローションを塗した手で、鰻を掴もうとして掴めないような動きをもってニユルニユルと責め立てる。

「ひっ！ ひいいッ！ やめ、やめ、やめて、もうイッチャう！ イッチャうよオッ！」
由良のまさに「手マ〇コ」といったような感触を生み出す巧みな手戯。肉柱の先端部が溶けそうな快感に、いよいよ巨砲が白い砲火を噴き上げそうになる。下腹から込み上げる射精感に促されるまま、一海は快楽の最も高いところへ登り詰める。

「ちよっと！ 勝手にイカないでよね！」

——ギユウウウウッ！

「ひぎッ!？」

今まさに尿道を駆け上がろうとしていた白い奔流が、巨木の幹へ至ろうとした瞬間。精液が通るべき尿道の、男根の付け根部分でそれが塞ぎ止められた。ペニスの、太く、反り返った胴を撫でるようにさすっていた貴沙良の手が、その親指で尿道をグッと押し潰して射精を阻んだのだ。

(なに!? 射精ッ、射精したいのにッ!)

射精しようと下腹部の奥で力強く脈動しているのに、体外へ排出されるべきものが塞ぎ止められて苦悶を生む。自分の身に起こったことが理解できずに激しい混乱が生じ、一海は目を白黒させる。

「なーに勝手にドピュドピュしようとしてんの? この私に断りもなく射精しようなんて十年早いわよッ! 蓮、これで縛っちゃって。漏れないようにギッチリとねッ!」

彼女のツインテールを形作る赤く細いリボンによく似た、紺色のリボンがスカートのポケットからシユルと取り出された。そしてそれは、傍らで垂れ袋の中の二つの秘玉を弄んでいる蓮へと手渡され、ペニスに巻きつけられる。

——ギユッ、ギユッ、ギチィッ!

「い、痛あッ!」

貴沙良の指が押さえている部分で、肉柱が鮮やかな紺のリボンで縛り上げられた。ギチギチと肉柱に食い込む細い布。蝶結びにされたそれは、御丁寧にも蓮が作った結び目の玉が尿道をしっかりと塞ぎ止めている。

「これなら出したくても出せないでしょ。お気に入りのリボン使ってあげてるんだから、喜びなさいよ?」

ツインテールの少女が、ゆっくりと様子を見るように指を離しても、白い樹液が鈴口か

ら漏れ出すことはなかった。食い込むほど強くリボンを結びつけられた、堂々とした逞しいペニス。その姿はまるで、注連縄を締められた立派な御神木のような。射精を封じられ、苦しうに身を振る少年の姿を前に、男の本能を制した優越感が快感となって貴沙良の背筋に震えを走らせた。

「貴沙良、やることが相変わらずえげつないなー」

とは口で言いつつも、止めるでもなく始終を眺めていた由良は、一海を射精欲求の爆発まで導いた亀頭按摩の手を離す。

執拗に揉み擦られたことに加えて縛られたこともあってか、始め綺麗な濃いピンク色だった雁頭は、明るい小豆色といったような色合いに様子を变えていた。

手をペトペトにした牡臭い粘液を舐め上げながら、H研会長である彼女はペニスをよく観察できる場所に陣取り、椅子に腰を下ろした。同会の研究員の“研究活動”をしばらく眺めることにする——という名目で、じつくりと少年の悦がり姿を鑑賞するためにだ。

「これくらい当然でしょ。躰は最初が肝心なのよ」

まるでペットの調教師かといったような口振りで返し、貴沙良は由良が移動して空いた一海の脚の間に、細身の体を入れる。その吊り上がり気味の目元にプライドの高そうな印象を持たせる美少女は、椅子に拘束された少年を見上げながら射精を封じられた肉柱に両手を添えた。

「こんな巨根しといて、ちよつと弄られたくらいで精子漏らしそうになるなんてあまりにも堪え性がなさ過ぎるんじゃない？」

「そんなやんわりとした責めの言葉を投げかけつつ、指が回りきらないほど凶太いペニスを両手で握る。今度はどんな声を出すだろう、どんな表情を見せるだろう。そんなサディスティックな欲情が、貴沙良の下腹部で熱く渦巻いていく。」

「そ、そんなこと言つたつてえ……」

「言い訳なんて聞かないわよ」

男とは思えない少女的な顔形と、貴沙良と同じくらいかそれ以下の華奢な体付き。そんな少年を、自分の手で快感に悶えさせている愉悅。ドクンドクンと大きく打つ心臓の鼓動に煽られるように、巨木を握る手に力が入った。

「早漏のくせに口答えして、その上、反省した様子もなくチンポ勃起させてるようなやつには、きつついお仕置が必用ねえ」

バットのグリップを握るような手付きで、凶暴なシルエットの肉柱を握り直す。ペロリと上唇を一舐めすると、しつとりと汗ばんだ手を軽やかに上下させ始めた。

——シコ、シコ、シコ、シコシコシコシコシコシコ……!!

「あふあひいいいッ!!」

一度絶頂に達しかけた敏感なペニスは、貴沙良の手が生み出す甘美な摩擦を衝撃的な快

しなやかな両足が強張り、爪先が何かを掴むかのようにギュッと握り締められる。

「ぐううう——ッ!! うぐうッ! ふぐう——ッ!?!」

出不い。出せない。射精しようとペニスがしゃくり上げるほど、少年の下腹部で切ない感覚が炸裂した。一海の頭の中は発散できない欲求が逆流してきたかのように、強大な射精への切望に溢れ返る。

「バックだねえ。こんなガツチリ縛ってあるのに出せるわけないじゃない」

射精しようと力強く跳ね上がる巨木をゆるゆるとしごき上げる貴沙良は、上気して桜色に染まった美貌に妖しい笑みを浮かべた。排精できずに苦悶する少年の姿に、昂奮やるかたなくくねる腰。到底長いとは言えない制服のスカートの中、ピンク色のショーツの股布はニチャリと糸を引く卑猥な汁で濡れていた。

「貴沙良、交代だ」

「えーッ……。もうちよつとイジメたかったのに」

頭上から降ってきた蓮の声に不服の言葉で答える貴沙良だが、しぶしぶといった様子で脈動するペニスから手を離す。

「まあいいわ。今度ゆつくりマンツーマンでしごきヌいてやるから」

肩にかかったツイントールの房を後ろに払い除けるようにしながら立ち上がると、くるりと踵を返す。すぐ後ろで交代を待つ蓮に片手をかざしてタッチを促すと、白衣を軽くな

びかせて銀縁眼鏡の彼女はそれに応えた。双方とも色白な手と手が、軽く触れあう。

「では、次は私だ。優しくしてやるから安心して任せろ」

白衣のクールビューティーはおもむろに制服の胸元に手をやる。そして、その制服独特の胸の編み上げ部分を解き、グイと大きくスリットを広げた。そこから溢れ出すプリンを思わせる柔らかかそうな乳塊が、たっぷんと揺れる。

（なにを、なにをするの……。また、口でオッパイを……。?）

ほんの少し、安堵があった。貴沙良の直接的かつ壮絶な手コキ責めを受けた直後だ。今、さらにペニスへの責めを加えられたらどうなることか。ほんの少しでも休む間があると思えば、また窒息寸前の乳房の圧迫を受けたとしてもこらえられる。そう胸を撫で下ろした。「さっきはシてもらったからな。今度は私が気持ちよくしてやろう、この胸で」

二つの乳膨をさらけ出し、椅子に囚われた少年の股の間に体を入れる。射精を封じられ、ギッチリと縛られているために萎えることも許されないペニスに、蓮の百センチを優に超えるであろう著乳が迫った。

「そっ、そんなッ……!? もっ、もう触らないでくださいッ！ 今これ以上されたらおかしくなっちゃいますッ！」

追い打ちの刺激が生み出すであろう苦悶を想像し、額や薄い胸板に玉の汗を掻きながら、一海は訴える。だが、その懇願はまったく無視され、天に向かつてそそり勃った巨木をそ

の谷間に埋めるべく、柔肉の著大な膨らみは左右から肉柱に迫る。

——むっにゆうう……。

豊満な乳房が鋼のように硬い肉柱を包む。指が回らないほど図太い男根を完全に包み込む豊かな胸すら、その長大な全体を包みきれずに先端から三分の一ほどが突出していた。

蓮の口元にまで迫る、猛々しく亀頭の笠を広げたペニスヘッド。男性器を構成する一つ一つの部位に芸術的なまでのエロティシズムを感じさせ、白衣の理知的痴女に発情を促す。「これのほうが貴沙良の手コキなどよりソフトで心地よいだろう？」

——にゅむッ、にゅッ、むにいッ、にゅぐッ、にゅッ、にゅッ、にゅッ、にゅッ。

しつとりと汗ばんで肌が紅潮し、シロップ漬けの白桃のような質感を見せる淫乳。つき立ての餅のように柔らかく撓みながらも、パン生地のように腰のある弾力でみっちり肉柱を圧迫する極上の乳淫。上半身全体を上下に揺すり、大きいストロークでペニスを搾る。

「はあああああ——ッ!! うあ、うああうう……ッ!」

確かに貴沙良のハンドジョブのような暴力的な快感ではない分、気が狂いそうな官能に苛まれることはない。しかし、このもっちりとした乳肉とその肌が肉柱を圧迫しながら搾り上げる感覚は、鮮明な快感が確実に快楽中枢を責める。それはサディスティックな手コキ以上に残酷な快楽拷問だった。

「あーあー、涎垂らして気持ちよさそうな顔しちゃってえ」

「なあに？ 私の手コキより蓮のパイズリのほうがそんなにイイわけ？」

今はギャラリーとして一步引いた位置にいる由良と貴沙良。片や茶化すように、片や自分の時とはあまりに違う快感反応に嫉妬混じりの言葉を投げかける。

外野の騒音を意に介した様子もなく、理知的美女の丹念なパイズリは続く。

まるで柔肉を硬い肉柱に揉み込むような、リズムに乗った乳肉の動き。人間の体の一部とは思えないほど熱い肉柱を、さらに加熱させるように快感を与え続けるその動きは、同時に蓮の官能をも昂らせる。

自らの手で左右から寄せ合わされ、楕円に歪んだ乳肉。肌を焦がしそうなほどに熱を放つペニスを乳肉がしごくたびに、乳肌の表面をゾクゾクと快感の虫が這い回る。それは屹立した胸の先端でも蠢き、桃色の乳頭が甘い痛みを放つほどに狂い勃たせた。

「ふっ、んっ、んっ……ほら、見てみる早乙女一海。君の規格外サイズの童貞ペニス、私の乳房に犯されているぞ。生涯最初のパイズリを施されている気分はどうだ？」

「ふうううう——ッ！ くふうううう——ッ！ またア、またイクウッ！ 出ますッ!!」
グンッと腰が突き出され、椅子の背もたれに預けた背中と爪先だけで体を支えたような格好で、一海は数度、腰を痙攣させる。

腰と一緒に突き上げられた巨木が、ズルンと柔肉のクレバスからビクビクと震えながら突き出た。リボンに縛られて体外への排出はできないながら、ペニスは人体に組み込まれ



た射精システムに従って大きくしゃくり上げる。

必死に射精しようと跳ねる男性器の動きを乳房のショックアブソーバーで受け止めつつ、長い黒髪的美痴女は、ペニスの根本から搾り上げるようにして胸の圧迫を強める。

(出したいッ！ 出したいのにッ！ 射精したい射精したい射精したい——ッ！)

それは射精を封じられた少年にとって、出したくても出せないものを、無理矢理に出させようとされる二重の責め苦だった。渦巻く思考はただひたすら射精を渴望し、ペニスに巻きついたりボンに怨念すら懐きながら、一海は悶絶する。

「あが、はあ——……ッ！」

「ふむ……。先に貴沙良の手でイカされた直後だったせいか、それともやはりただ早漏なのか……思いの外早かったな」

二度の絶頂を経て一層膨張したのか、根本を縛った蝶結びのリボンは痛そうなほど肉柱に食い込み、その勃起力だけでそれを引きちぎってしまえそうなほどだ。蓮は冷酷なほど淡々と状況を観察し、拷問器具に等しいその著乳がペニスに加える乳圧を緩めた。

「も、もお、許して……紐、取って、取ってください……。出させてください……」

拷問にも似た快楽責めが緩んだその片時、一海は糸の切れた人形のように力なく頭を横に傾げ、一筋涎を唇の端から垂らして弱々しく哀願する。大きく肩で息をしながら、時折その肩がブルブルと震えた。精神的にも肉体的にも限界に近いことは、その表情と汗に濡

れた体が見せる反応から感じ取れた。

「なあに言ってるんだかあ。まだアタシが残ってんだから、もうちょっと頑張ってくんなくちや。なッ、一海ちゃんッ」

実際には一時間も経ってはいない。だが、熾烈な責めを受け続けた身には、もう数時間もそうして囚われていたのではないかと錯覚するほどの疲労感がある。

（もうイヤだ、イヤだ……。このままじゃおかしくなる、頭が変になる……）

「……外しちゃって大丈夫なの？ 逃げられたら由良のせいだからね」

「だいじよぶだつて。この大勃起したデカチンポ振りかざしながら逃げたりなんかしないつて。なー？ 一海い？」

貴沙良が腕組みして訝しむ前で、健康的な小麦色の肌の彼女は一海を拘束した黒い革のベルトを取り払う。だが、ツインテールの少女が心配していたような、解放された少年が逃げるとうような素振りはない。詰め襟の上着も、白いワイシャツも、そして肌着までも。着衣の全てが乱れ、汗ばんだ体は疲れきって、ぐったりと椅子に身を委ねている。

「さあて。真打ち登場つてことで、トドメに天国連れてつてやるぜ」

一海の細身の体は、由良の手によって引き摺り下ろされるようにしてゆっくりと椅子から床へと倒された。

仰向けに転がった少年の体。その半裸にされた肢体の一部に、短い黒髪 of 陵辱者は視線

を注ぐ。絶頂に二度達しながらも精を吐き出せず、リボンに縛られたことでその勢いを維持させられている巨木だけが、剛健にいきり勃っていた。

「やっぱデカイなあ。こんなデカブツ、減多にお目にかかれないぜ」

うっとりとして、自重で倒れ込み一海自身の腹の上に横たわっている肉柱を見詰める由良は、おもむろに少年の体の上を跨いで仁王立ちする。

「手コキとパイズリ、気持ちよかったか？」

意識がはつきりしているのかすら疑わしく思える視線を天井に向けている少年に、真上から瞳を覗き込むようにして問う。すると彼は、答えの代わりに視線を向け、慈悲を請うような目で彼女を見上げた。

由良はニッと白い歯を見せ、屈託のない笑みを顔に浮かべると、垂れ気味の目元が印象的な彼女は丈の短いプリーツスカートの左右の端を摘む。

「手コキ、パイズリときたら、もう次はここっきゃないよな。いよいよ、大本命のマ○コでチンポ生しごきだア！」

——ヒラッ……。

鮮紅の裾が躊躇なく捲り上げられる。制服のスカートが鮮やかな赤だったこともあり、まるで闘牛士が赤いムレタを翻すようにしてスカートは捲れ上がった。

「……な、ッな、なアッ……!?!」

そこには、普通ならば存在するはずの下着がない。捲られた赤いプリーツスカートの中身は、水着の日焼け跡が残る生の下半身そのものなのだ。パクパクと口だけが動き、視線は由良の秘境に釘付けになった。初めて見る女性の部分。逆三角形に生え揃った恥毛は、黒い芝生を思わせる。それは日に焼けず元の血色のいい肌の色を残した下腹部に、卑猥なアクセントを与えていた。

射精封じに困憊した頭に、昂奮に沸騰した血がドッと流れ込む。霧が暗れるように朦朧とした意識が一気に冴え、鮮明になる。だが、熱い血流で過熱した頭に正常な思考はなく、視覚から伝えられるワレメの情報だけが脳内に渦を巻く。

「ずっるいーッ!! 由良抜け駆けで童貞チンポいただいちやうつもり!？」

「誰が童貞を奪取するかはクジ引きで決める取り決めだったはずだぞ」

由良の独断に、一斉に上がる抗議の声。あまり感情的な声を出すことのなかった蓮でさえ、この時は怒気が見え隠れする声色で由良に迫る。

「一海が弄くり回されるの見ててもうテンパってんだから。最後まで待たされた分、役得があつたついでいいじゃん。ということ、一海の童貞はアタシがいただくことに決定!」
ピシッと切り、ノーパンで秘部を晒した痴女生徒はスカートのホックを外し、下半身を隠す唯一の衣類を脱ぎ落とした。そして、まるで横たわった少年に見せつけるようにして膝を開き、一海の腰の上にはしゃがみ込む。

二人分のプーイングは続いているが由良はそれを無視し、しゃがんだことで大きく開いた股の奥に指を滑り込ませる。

「んんふッ……ずっと待ってたからマ○コが濡れ過ぎてピラピラがふやけそうだわ」

——にちゃつにちゃつにちゃつ、くちゅくちゅぬちゅ……。

横たわった少年の視線は、彼女がしゃがみ込んだのに合わせて自分の股間の方向へ向いていた。その視線の先で、制服を着た淫獣のとろけた肉の洞穴が、彼女自身の指で掻き混ぜられている。

挿し、抜き、奥を攪拌するように指を回す。丹念に淫肉を解すその指の動きに合わせて、透明な肉汁が飛沫混じりにトロトロと滴り落ち、巨木を濡らしていく。

「ずっぷりハメて、マ○コでしごいてしごいてしごいて、死ぬほどイカせてやるからな」
「あ……あ、ああ、ああッ、ヤッ、やめ……もうイカせないでください、ひいいッ!!」

由良の言葉に、初めて目にする女性器に奪われていた意識が舞い戻る。そして、自らのペニスが痴女の肉口に狙われていることを悟って血の気が引く。三度の射精を押さえ込まれ、執拗に弄ばれた男根はグロテスクなまでに充血し、張り詰めていた。拷問にも近い刺激の連続に、触れただけで脳天まで快感が突き抜けるほどに敏感になっている。今ここで、まさにトドメといわんばかりにセックスにまで至ったなら、一体どうなってしまうのか。自分の脳神経は焼き切れてしまうのではないか。一海は戦慄に引き攣った顔で、ワナワナと

唇を震わせた。

そんな少年の恐怖も知らず、由良の淫穴から引き抜かれた指がねっとりとした肉汁の糸を引きながらペニスに伸び、触れる。すでに垂れ落ちた淫液にまみれている肉柱は、指が触れるやにゆるりとぬめって由良の手から逃げた。この状況から逃れたい一海の意志が、ペニスにまで伝わっているかのよう。

「痛くないから、全部この由良さんに任せときなつて。気持ち良くしてやつからさ！」
にゆるにゆると特大の鰻のように指から逃げる巨木をガシッと掴む。そして、その先端からリボンが食い込んだ付け根まで、自らの肉洞から湧き出した発情汁を塗り込んでいく。そうして肉柱に触れているうちに、無意識にキュンキュンと締め上がる膣が、切なく官能を昂らせる。由良のプリプリとした張りを見せる引き締まった臀部が、艶めかしくくねり、宙に8の字を描いた。

「くうーッ！ ムラムラしてきたッ！ もう入れちゃうからなッ！」

——ペロ……。

しっとりとした唇の間を割って薄桃色の舌が姿を現し、下唇を大きく一舐めする。その様を見る一海の背筋をゾクリと走るものがあつた。またあの射精できない苦痛を味わうことへの恐怖、転じて異性への畏怖。そして、とろけた肉の鍾乳洞へ自らが入り込んだ先にあるであろう快感への淡い期待。それらが入り混じった自分でも理解し難い感情が、彼

の中で渦巻く。混乱一步手前の思考の中で、今まさに童貞を奪われようとしている少年は、「最初の女」になる彼女のヌラヌラとヌメるワレメただ一点を見詰めていた。

「そんじゃあ……童貞チンポ、いったきまーすッ！」

由良自身の手で直上を向かせられた肉柱が、その矛先を蜜が溢れ出した花のような部分の中心に据える。しゃがんだ姿勢で少し腰を上げた状態から、結合する位置を合わせた牡と牝の性器をゆっくり腰を落として近付けていく。

——ぐぶぶぶぶぶ……ずにゆぶぶうッ！

「ンッくはああああああ〜!! 拡がるうううッ！」

「うあああああああ——ッ!!」

肉唇が目一杯広がりきり、大きく張り出した亀頭の笠までが溶けた肉の中に埋められる。さらに奥へ奥へとオーバーサイズの肉柱を呑み込み続ける淫穴は、潤沢な膣の涎を潤滑油としながらもきつい。ゆっくりと巨木に膣肉を拡張されるようにして、由良は貫かれていく。

「くうはあア——……。きつつう……ッ！」

グググッと落とす腰に体重をかけて膣の最深部までペニスを頬張り、少し苦しげに片目を伏せて笑う。凶太いものをハメ込んだ淫穴から膣肉を介して感じる肉大砲の灼熱感、充実感を伴う淫らな気分を盛り上げた。大股開きにしゃがみ込んだ制服の痴女は、肌が艶

光るほど汗を浮かべたその褐色の健康的な肢体を身震いさせる。

(あ、あ、ああ…… 凄……温かい……。この感触、この温度が女の人の中……！)

その時ばかりは、射精を二度押し止められ、度重なる刺激に痛みを放つほどカチカチに勃起しきつたペニスの苦痛も忘れていた。自らの肉柱から伝わってくる女しか持ち得ないところけた肉壁の感触と、その温もりにただただ酔い痴れる。

「えっへへーッ、一海の童貞いっただきい〜」

その声につられて、一海の視線がにんまりと大きく唇を弧に歪めて白い歯を見せる由良の顔に向く。今こうして改めて見れば、目鼻立ちのはっきりしたその顔立ちは美形の一言に尽きる。初めては好きな人と……などと、生娘じみた考えを持っていた一海だが、ふと脳裏に「こんな美人になら奪われても本望だったのでは？」という思考が過ぎる。

「さー、こっからが本番だア！」

ほんの少しの間甘い感情に浸っていた脱童貞したての少年を、次の瞬間には苦痛にも似た激しい快感が襲っていた。

「うあああああああ——ッ!!」

——にゅッぽッ! ぢゅつぷうッ! ぢゅぽオッ! ぐぢゅうッ! にゅッぽオッ!

「ひゃッはアーッ! マ○コッ、マ○コめくり返りそオッ! オおッ、おうう——ッ!」

しゃがみ込んだ脚の両膝に左右それぞれの手を当て、四股を踏むような格好で屈伸する

ように激しく体を上下に躍らせる。

オーバーサイズのペニスが入り込まれた由良の膣はあまりに窮屈だ。その窮屈さ故に、みっちり密着した肉柱と肉穴の粘膜同士が擦れる快感を飛躍的に高める。巨木がズリと引き抜かれる動作で、高く張り出た雁首のエラが膣肉を搔き毟るようにして刺激し、極上の淫快を巻き起こした。

もちろん、快感は彼女だけが味わっているものではない。同時に一海にも巻き起こっている事象なのだが、少年のそれはもはや味わえるような甘美なものではなかった。

ヌッチョリととろけた痴女の肉穴は、ただ挿入しているだけでもきついというのに、さらにギュウギュウと締め上げてくる。そればかりならいざ知らず、由良の肉洞はその奥にプツプツとしたただの粘膜ではない感触を持っていた。それが、元氣よく彼女の腰が跳ねるたびに、膣奥に擦れる龟头をズリズリと削るように手荒い刺激を与える。ただでさえ度重なるペニス刺激と射精封じを受けているというのに、そこにきて初体験の牝穴が信じられないほどの名品性具ではなかったものではない。

「ひ、きひいいいいッ!? やめッ、やめへッ、もッ、もオ、やめえくだひいいッ!!」

「なにいつてんだかア! まだハメたばっかじゃん! たあっぷりマ○コの中でしごいてやるんだから、これからこれからアッ!」

気が狂いそうなほどの快撃が肉柱を責める。由良の膝のバネを活かした腰のピストン運



動は、巨木に膺がこなれてきたせいとその激しさを増す一方だ。

男性器という図太い一つの快感神経から快楽中枢へダイレクトに伝わる刺激。脳神経を焼き切ってしまうような快感信号に、一海はただその細い体をくねらせて悶え、少女じみたその声で喘ぐばかりだった。

「あつはア——ッ!! あはああア——ッ!! イイイ——ッ!! キモチイ——ッ!! ちんぼズボズボ奥までイイッ!! ああ——またイクイクウッ!! また凄いのマ○コに達しようとしていた。」

何十分だろうか。眉目秀麗な少年を犯す彼女は数度目のアクメに達しようとしていた。巨根にもすっかり慣れた由良の腰は、縦のみならず横にもまるでベリーダンスのように滑らかに動く。子宮口を龟头の先で捏ね回すような細かい腰回し。膺液を飛び散らせるほどの大きなグラインド。キュッと瓢箪のように括れたウエストを軸に、プリッとしたハムのような尻は、巧みで卑猥なダンスを踊る。どの動き一つにも、尻頬の甘肉がタプッ、プルッと震え、二人のセックスを見詰める蓮や貴沙良が、同性であるにもかかわらず欲情を抱いてしまいそうな光景を見せた。

「イイ——イクイクイク——ッ!! イッ、あッ! イイクイクイクイクッ!! あ——ッああはあああ——ッ!」

電気按摩機にも似た小刻みな振動が、剥き出しの下半身に走る。淫快の極致に満面の笑

顔を浮かべ、仰け反った体をアクメの痙攣が襲う。

——ぴゅううッ！　ぴゅぴゅッ、ぴゅッ、ぴゅッぴゅうッ！

巨木を啜え込んで大きく口を開けた淫裂から、透明な液体が数度激しい勢いで噴き出した。無色無臭で、膿液とは違いさらりとしたその液体は、仰け反ったことで突き出された形になった股間から一海の体に降り注ぐ。少年の色白な肌に絶頂の潮が浴びせかけられる光景は、体液が鈍く煌めき、幻想的な淫靡さを放つ。

「潮を噴くほどか……彼のペニスはやほどキクラしい」

「それより大丈夫なの？　なんかもうほんと、イッチャつてる感じなんだけど……」
生き生きしているというのが最適といった感のある由良に対して、彼女に跨がれて腰の上で一人ロデオ大会をやられている一海の様相は酷いものだ。

生気があるのは無理矢理に勃起状態が維持されている肉柱だけで、それ以外は全身が虚脱状態に陥っている。虚ろな目には涙、端整な作りの鼻からは鼻液が、桜の花片を合わせたような唇は締まりなく半開きになり唾液を垂れ流している。

「やっぱ！　夢中になってやり過ぎたか。あんまり具合がイイもんだからさァ、勝手に腰が動くのなんのって」

汗で制服が彼女の薄褐色の肌には張りついていていた。楽しげに笑みを浮かべる顔にも玉の汗が伝い、形の整った顎先から一滴、また一滴と滴り落ちる。

たまらず涎が垂れ落ち、床を濡らす。服従を強いられる快感、それに従う悦楽。身も心も酷く満たされた感覚に包まれながら、一海は肛穴穿りに悶える。

「ふふん、当然の答えね。それじゃあ、ペットらしくたつぷり可愛がつてあげるわ」

「ひやあああああッ!? ソコッ、ソコ変ですッ! いやああああ、ソコだめえーッ!!」

まるで菊門の奥にスイッチがあるかのように、貴沙良の指が肛穴の中のふくよかなある一部をグリグリと刺激するたびに、肉柱がビキビキと激しくいきり勃った。ペニスを内側から捏ね回されているような感覚に、快感のボルテージが急激に高まる。

(凄いッ! 凄い凄い凄いッ!! もう溶けちゃう、気持ちよ過ぎて溶けるうーッ!)

ガクガクと獣のように腰が振れ、床に先端がつきそうなほど立派な男根はダラダラと先駆けの汁を垂らす。脳髓に電流が走っているような、視界が揺らぐほどの快絶。このままいつまでもこうされていたい。肛悦の少年がそう願ってしまうような、至高の快感だった。「どう? 前立腺責め、最高でしょ? イキそう? イキそうでしょ? わかるのよ、前立腺がビクビクしてるもの。イクんでしょ、ホラホラホラッ! チンポもしごいてあげるから出しなさいよッ! アンタのくっさい精子、出して見せなさいよッ!」

——ぐりゅぐりゅぐりゅ、クリクリクリクリ……

指先が、胡桃ほどの大きさのそれを執拗に捏ね回す。そればかりか、鋼のようにガチガチに強張ったペニスを握り、豪快な牛の乳搾りを思わせる手付きでしごき下ろす。重力に

引かれて垂れ下がった宝玉袋が、しごく少女の手の動きが上死点に至るたびに叩き上げられ、その心地よい微痛が一海を狂乱させた。

「いいひいいいい——ッ!! いいッ! イクッ、イキますッ、ボクイっちゃいますッ! 精液でちやううッ、うううううう——ッ!!」

ガクガクガクと、激しく痙攣した腰が跳ねる。前立腺を責め立てる貴沙良の指先にも、肛悦少年の絶頂が訪れようとしていることが如実に感じ取れた。

——にゅぼッ……。

「あああッ!? なんでッ……!!」

寸前。精囊から特濃の汁が尿道へ進ろうとするまさにその寸前で、貴沙良の指が悶える彼の穴から抜き取られた。最高の悦びに至りかけたところで寸止めを食らった一海は、心底不満そうに声を上げ、背後の痴少女を首だけ捻って振り返り、抗議の視線を送る。

「気が変わっちゃった。なんか、アンタだけ気持ちよくなつて面白くないし」

急に拗ねたように無然とした顔になり、床に脱ぎ捨てられた彼のシャツを拾い上げた。そして、それでアナルに差し込んで一海を散々鳴かせた中指を綺麗に拭った。

「そッ、そんなア……。あんまり、です……」

つまらなそうに栗色のツイントールを肩の後ろに払い除けると、悲痛に訴えかける一海を無視してツカツカと歩き出す。その行き着く先は、黒板の前で整然と並ぶ机を威圧する

ように置かれた、やや背の高い教卓。

「そんなにかせて欲しいなら。ここまできて私に奉仕しなさいよ。私を気持ちよくさせられたら、御褒美にかせてあげてもいいわよ」

ニイツ、と小悪魔の媚笑が浮かんだ。吊り上がり気味だが大きな目など、容姿としては本来の歳よりも幼くすら見えそうな彼女が、まるで手練れのSMクイーンのような妖艶さを纏う。そのえも言われぬ迫力と色香に、一海は目眩を覚える。

(……御奉仕したい……なんだろう、貴沙良様のために、何かしたいこの気持ち……。これって貴沙良様のフェロモンとか、カリスマとか、そういうのかな……。)

両腕は後ろ手に拘束されたまま。身を起こすにも苦勞しながら、ツインテールの美少女が見せるその表情に目を奪われ続ける。彼女に命令されること、それに従うことに、ジョンと下腹部が熱くなるような感覚を覚えるのだ。その服従する快感が、一海を貴沙良の下へと急がせる。

「きっ、貴沙良様……!! きましたッ! ボクに御奉仕、させてくださいッ!」

教壇の上に腰を下ろし、スラリと長く細い脚を組んだ彼女の前に、マゾ少年は跪く。そして、仰ぎ見るように貴沙良を見上げて奉仕の許しを願う。

「まったく……そこまでして、主人である私にかせて欲しいなんて、凶々しい変態ペットねアンタ。まあいいわ。アンタがどれくらい舌を使えるか、私のオマ○コでテストして

あげる。せめて犬よりましな舌使いしてよね」

嘲弄する言葉とともに、少年の女主人は教卓の上で長い脚を伸ばし、見せつけるように下着を脱ぎ下ろす。下半身を包んでいた純白のショーツから、色白な左の脚を抜き取る。小さく丸まった下着を足首にまわりつかせたまま、右の脚を天板の上へ上げ、その膝を抱いた。左脚は投げ出し、右脚だけがM字開脚の形になっている不自然な姿勢で、お預けを食らった犬のような仕草で一挙手一投足を見守る一海に視線を落とす。

「さ、いいわ。すっかりやってよね。気持ちよくできなかつたら、その格好のままここに置いて帰るわよ」

挑発するような笑みを浮かべた貴沙良は、下着は脱いだながらもスカートが前垂れとなつて隠していたそこを、自らプリーツスカートの裾を摘み上げて一海に晒す。脚の付け根から膝までの長さに近い距離にある少年の鼻には、確かな牝の淫臭が感じ取られた。

「は、はいッ！ いっぱい御奉仕しますッ！」

クンニリングスは、研究活動の中で何度かやった経験がある。由良や蓮はそれなりに満足してくれたようだったが、採点の厳しい貴沙良相手にはどうだろうか。内心の不安と、彼女の淫裂に舌を這わせることができる悦びに、心臓がドクンドクンと大きな鼓動を打つ。

——ぺろお……。ペロッ、ペロッ、ペロペロペロッ、ぢゆるるうーッ。

恥丘に鼻先を埋めるようにして、痴少女の牝裂に口つける。すでに僅かな潤いを帯びて

いたそこから発せられる、胸の奥から心地よくさせるような牝の匂い。一海は夢中で舌を伸ばし、貴沙良の味を精一杯舌に擦り込もうと肉の合わせ目を丹念に舐め擦る。

「フ……うん……。思ったより、上手いじゃない。同じペットだけど、犬よりはマシね」
微かに鼻を鳴らし、痴少女は目を細めた。見た目以上にザラついた舌が粘膜を擦る感触は、予想以上に甘美な刺激をもたらす。ラビアに沿うように舐め上げた舌は、楔のように舌先を尖らせ、包皮に隠れたクリトリスをグニユリと押し潰すように捏ねる。

「ふうッ……！」

ピクピクピクッ、と下肢が陰核から走った官能の電流に反応して震えた。制服の内側では、チェリーピンクのバストトップがキュンと突き勃ち、ムズムズとした疼きを放って慰撫を催促していた。

（貴沙良様……気持ちいいのかな？　どんどんオマ○コの汁の味が濃くなってくる……）
……ちゆるるッ、ぢゆるうーッ、ぴちやッ、ぴちやッ、ぢゆるッ、ぢゆるッ。

唾液を乗せた舌で襷を一枚一枚丹念に磨くように舐め、溢れ出した貴沙良の愛蜜を無駄なく舐め取り、啜り、味わう。奉仕し、相手に快感を感じてもらおう悦び。従順なマゾの氣質の少年は、彼女が愉悅に媚肉を濡らすほど、それを自らの悦びとして官能を昂らせる。

「ンンッ……やっぱ卑しいマゾね一海。御主人様のオマ○コ舐めるのにこんなに必死になって、縛られてるのにチンポバキバキに勃起させて。アンタみたいなマゾ豚にはね……」

私からとっておきのプレゼントをあげるわ」

一海の舌撫に、貴沙良の下腹部で湧き上がっているものがあつた。こらえるにこらえきれない、生理的な現象。それを発散するために都合がいいよう、投げ出していた脚を持ち上げ、教卓の上にはしゃがみ込むような格好で眼下のマゾ少年を見下ろす。

「ほらッ、口、開けなさいよ。でないと、頭の天辺からオシッコまみれにしてやるわよ」
「むしろそうしてやるのが目的ではないかと思うほど後者に力を入れて言い放つと、M字開脚した両膝に両手を乗せ、放出の角度を見計らうように腰を小さく動かす。

「お、オシッコ……」

「そうよ。嬉しいでしょ？ 私のオシッコなんて、札束積んででも飲みたいってヤツがいるくらいなのに。アンタは私のペットだから、特別にタダで飲ませてあげるわ」

言いながら、彼女自身も昂奮した面持ちで上唇を一舐めた。そして、右手を添え、下半身の淫唇を割り広げて尿道口を外気に晒す。

「ど、どうぞ……いっぱい、出してください……」

「お望み通り、たくさんあげるわッ！ しっかり受け止めて、残さず飲み干すのよッ。わかったわねッ！」

コクンと頷き、一海はアングリと大きく口を開く。やや上向きに顔を上げ、痴少女の顔と尿道口を交互に見やりながら、期待に肉柱をビクンビクンと跳ねさせる。

「ん、ふ……いくわよ……ッ」

尿道口から緊張が抜けるのを、一海の目は捉えていた。同時に、下腹部にグッと力が入り、排尿口が僅かに盛り上がる。そして、一拍の後。

——ジョパアッ、プシヤア——ッ!!

激しい水音を立て、薄く金色に色付き、芳しい乙女の香水が迸った。それは微かに飛沫を飛ばしながら、その勢い故にほとんど弧を描かず一直線に一海の口腔に流れ込んだ。

「あぶふッ! ンぶぶはアッ! がほッ!」

——ビシャシャシャシャシャア——ッ!!

水流の軌道が逸れ、マゾ少年の顔を襲う温かい香水。波濤のように激しい水飛沫を上げ、希少な美少女の水は彼を頭から濡らしていく。

(あ、ああああ……ッ! 温かい……これが貴沙良様の温度……)

少しでも聖水を多く受け止めようと舌を伸ばし、若々しい牝の味がするそれをゴクゴクと喉を鳴らして嚥下する。体を芳しい水が滴り、全身が貴沙良のものに濡れていく快感に一海は恍惚となつてブルブルと身震いを催す。

「ッふう……どう? 美味しい? 私のオシッコ」

徐々に緩やかになつていく放水の勢い。排出の快感に頬を上気させながら、放尿少女は薄く淫蕩な笑みを浮かべた。自分の排泄した小水を嬉々として、法悦の面持ちで浴びる少



年の姿にクラクラと目眩がするような昂奮を覚える。

「ッぷあ！ おッ、美味しい、美味しいですッ！ ンぐッ！ うんぐッ！」
——じよろろろ……。

小水は始めの痛いほどの水勢を失っていた。その軌跡は弧を描き、口元を逸れ、顎、さらに胸元へとその到達点を下げる。それを追うように、一海は膝立ちに腰を上げ、小柄なドミナの股間に顔を寄せて勢いの失せた小水の奔流を口に受け止めた。

「ッふうう……」

——ぶるるるッ……。

動物的な身震いを起こしながら、尿道に感じる残尿感の源を振り絞る。ピユッ、ピユッと二、三度噴き出して一海の鼻先を打つと、短いながら激しかった放尿は終焉を迎えた。

「ッぐ、んぐッ、ンッふううう……」

ゴクゴクと喉を鳴らし、口一杯に溜まった少女の香水を飲み干す。それとともに広がるたまらない幸福感。体の中から貴沙良に染められる感覚が、マゾヒズムの官能を著しく昂らせた。

「オシッコ飲まされて感じたの？ 先走り汁が出過ぎて、もうチンポ汁だかオシッコかわからないくらいになってるじゃない。変態ッ！ マゾ牡豚ッ！ アハハハッ！」

甲高い笑い声を上げながら、眼下で恍惚の表情を浮かべて飲尿の悦に浸る少年をなじる。

言葉で責めれば責めるほど、彼女の中でサディストの欲情が熱く膨れ上がった。

小水を浴びて一層昂奮の度合いを高めた少年を見下ろす。その股間でこれ以上ないほど充血し、亀頭を赤黒く膨らませたペニスを一瞥した。

「なあに、コレ？ 前立腺弄ってあげた時より勃起してない？ ホント、どうしようもないスケベねえ。まったく、見てて哀れなほどだわ」

小さく嘲笑じみた言葉を投げつけると、サディストの痴少女は両足に履いた白い上履きを足から脱ぎ落とす。そして露わになった紺色のニーソックスに包まれた足の先で、張り詰めて光沢を放つほどになったペニスヘッドを踏みつける。硬い弾力のそれを、足の裏でグニグニと踏み捏ねた。

「ああはッ！ き、貴沙良様ッ！ ダメ、ダメですッ！」

ねっとり垂れ落ちる先汁にぬめり、踏みつけにされた肉柱は右へ左へとツルツルと滑って動く。ソックスの心地よい感触が鈴口を刺激し、足の裏で亀頭が滑るたびに甘美な電流が逸物から脳天まで走り抜けた。小水が染みる目を開き、貴沙良のオーバーニーのソックスに包まれた足が自らの剛直を弄ぶ様を目にする。

（貴沙良様の足ッ、足に踏まれてるッ……！ いやらしくて綺麗な足にッ！）

酩酊にも似た、ジンジンと脳髓が脈動しているような昂りが襲う。明らかに卑猥な意味を持って、その足先は男根を執拗に圧迫した。虐げられる悦びは、踏みつけられるという

直接的な行為により明白な官能となつて一海を淫虐の高みに押し上げる。昂揚した性感に腰がガクガクと前後に振れ、ペニスをソックスに包まれた足に擦りつけさせた。

「フフ……どうしたのよ？ まさか足でされるの好き？ チンポが気持ちよくなるなら、手でも足でもなんでもいいわけね、アンタは」

長大な肉柱を付け根から先端まで、撫でるように爪先を滑らせる。それに反応してピクピクピクと跳ねるペニスに、貴沙良はさらに苛めてやりたい衝動に駆られた。竿の下にぶら下がった宝玉袋を爪先に乗せるようにして、タップタップと揺り動かす。

「ああはッ……!! きもちッ、気持ち、いいですうッ……!!」

喜びに甘い笑みを浮かべながら、彼女の足が生み出す快感に酔う。陰莖包皮とソックスが擦れる心地よい摩擦感が、前立腺責め、浴尿と限界まで高められた官能が徐々にその最高潮に近づいていく。

「チンポがビクビクしてるわね。散々焦らされたから、もうイキそうなんでしょ？ お尻の穴穿られて、オシッコ飲まされて、その上足でチンポ弄られてもうイキそうだなんて、もうホント救いようのない変態よねえアンタはッ!」

ニンマリと笑い、片足で巨棒を踏み擦るだけだったものを、両足でそれを挟み込む。そして、先端からズルッと根本までしごき下ろした。

「あひあッ!? あくああああーッ!!」

——ズリイッ、ズリイッ、ズリンッ、ズリイッ、ズッ、ズリッ！

足の裏だというのに柔らかい貴沙良のそこは、オーバーニーソックスの肌触りも心地よくペニスを包み込んでしごき立てる。手に握られたものとは違う、新鮮な感触が変態的な欲情を煽った。

(足ッ！ 足ッ！ 足いッ！ ああああッ！ ソックスの足気持ちいいいッ！)

盛りをついた犬のように宙に腰を振り、貴沙良の両足が作り出す快絶の狭間にペニスを突き立てる一海。がに股になりながら、グイグイと両の足の裏を強く合わせるようにして肉柱を圧迫し、搾り上げる貴沙良。動きが互い違いになり、摩擦のスピードが増していく。「貴沙良ッ、さまッ！ ボクイキそうッ、イキそうですッ！ イッてもいいですかッ、精液出してもッ！ びゆるびゆるーッて！ 出してもッ、出してもいいですかあッ!?」

小水に濡れた少女のような美貌を上向け、貴沙良を仰ぎ見るようにして懇願する。前立腺責めで寸止めされ、小水を浴びせかけられそして飲み、昂りに昂りきったものが下腹部で沸騰していた。イキたい、イカされたい。蠱惑的な媚少女に罵られ蔑まれながら、最高の瞬間を迎えたい。ただそれだけのために、必死で哀願する。

「アハハッ！ そんなに出したいの？ 足でしごき出されたい？ ニーソックスの足に精子どびゅどびゅどびゅどびゅどぶつかけてほしい？ 私の足をアンタのチンポ汁臭くしたい？」
「ハイッ！ ハイッ！ ハイッ！ お願いしますッ！ 貴沙良様の足にッ、足にいッ!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫は、全編の方向性をきまめる

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!